

2023 UK 超短期派遣プログラム 報告書



目次

1 UK 超短期派遣プログラムの目的	4
2 参加学生の紹介	4
3 プログラム日程	5
4 英国の概要	6
4-1 英国の基本情報	6
4-2 産業	6
4-3 イギリス及びロンドン、ヨークの地理	6
4-3-1 ロンドン	6
4-3-2 ヨーク	7
4-4 英国の社会・経済・文化的特徴	8
5 事前学習について	10
5-1 12/7 (水)	10
5-2 12/21 (水)	10
5-3 1/11 (水)	10
5-4 2/13 (月)	11
6 訪問先の詳細	12
6-1 NPL について	12
6-1-1 概要	12
6-1-2 見学内容	12
6-1-3 東工大生の研究発表	13
6-2 Imperial College London について	13
6-2-1 大学概要	13
6-2-2 訪問内容	14
6-2-3 東工大生の発表内容	15
6-3 Queen Mary University of London について	16
6-3-1 概要	16
6-3-2 訪問内容	16
6-4 ヨーク大学	17
6-4-1 大学概要	17
6-4-2 ヨーク大学 1 日目	18
6-4-3 ヨーク大学 2 日目	21
6-4-4 ヨーク大学 3 日目	23
6-4-5 ヨーク大学の寮	23
6-4-6 東工大生の発表内容	25

6-5	日産自動車	25
6-5-1	日産自動車概要	25
6-5-2	英国日産自動車製造概要	26
6-5-3	訪問内容	26
6-6	博物館について	27
6-6-1	大英博物館(The British Museum)	27
6-6-2	ロンドン自然史博物館(The Natural History Museum)	29
7	その他	31
7-1	食事	31
7-2	町の様子	33
7-2-1	ロンドン市内	33
7-2-2	ヨーク市内	35
8	所感	37
8-1	物質工学院 学士1年	37
8-2	建築学系 学士2年	37
8-3	融合理工学系 学士2年	38
8-4	化学系 学士2年	39
8-5	融合理工学系 学士2年	40
8-6	機械系 学士3年	40
8-7	機械系 学士3年	41
8-8	材料系 学士4年	42
8-9	融合理工学系 学士4年	43
8-10	情報理工系 学士4年	44
8-11	融合理工学系 学士4年	45
8-12	機械系 学士4年	47

1 UK 超短期派遣プログラムの目的

本プログラムはグローバル理工人育成コースの下記 4 つのプログラムのうち、4)実践型海外派遣プログラムの一環として実施された。

- 1) 国際意識醸成プログラム: 国際的な視点から多面的に考えられる能力、グローバルな確約への意欲を養う。
- 2) 英語力・コミュニケーション力強化プログラム: 海外の大学等で勉強するのに必要な英語力・コミュニケーション力を養う。
- 3) 科学技術を用いた国際協力実践プログラム: 国や文化の違いを越えて協働できる能力や複合的な課題について、制約条件を考慮しつつ本質を見極めて解決策を提示できる能力を養う。
- 4) 実践型海外派遣プログラム: 自らの専門性を基礎として、海外での危機管理も含めて主体的に行動できる能力を養う。

実践型海外派遣プログラムは、下記の 4 つの能力の育成を目指すものである。

- 1) 将来計画と関連付けた明確な目標をもって積極的に海外研修に参加し、帰国後も、将来計画と合わせた行動を継続できる。
- 2) 訪問国の概要、歴史・文化などを説明でき、訪問国に関連した自分の学びを深めるために主体的に行動し、今後の留学やキャリアの参考にできる。
- 3) 渡航中の健康管理、危険回避の方法について、常に実践している。
- 4) 病気になったり、事件・事故に遭遇した場合の連絡先(医療機関や大使館、警察など)を把握しており、有事には、自分自身で解決できる。

2 参加学生の紹介

所属	学年	役割
物質理工学院	B1	報告会リーダー
建築学系	B2	発表資料エディター
融合理工学系	B2	HPレポート記事執筆
化学系	B2	発表資料エディター
融合理工学系	B2	写真撮影
機械系	B3	報告書エディター
機械系	B3	報告書エディター
材料系	B4	リーダー
融合理工学系	B4	サブリーダー
情報通信系	B4	写真撮影
融合理工学系	B4	事前学習リーダー
機械系	B4	交通係

引率者

物質理工学院材料系 准教授 小林郁夫

学務部留学生交流課 一ノ瀬康子

3 プログラム日程

日	訪問先・活動	宿泊
2月21日	火 9:35 羽田発 15:15 ヒースロー着	IBIS LONDON EARLS COURT
2月22日	水 National Physical Laboratory 訪問	
2月23日	木 Imperial College London 訪問	
2月24日	金 Queen Mary University of London 訪問	
2月25日	土 博物館など各自自由行動	
2月26日	日 昼頃、鉄道でヨークへ移動(約2時間)	ヨーク大学の寮
2月27日	月 ヨーク大学1日目	
2月28日	火 英国日産自動車製造 訪問	
3月1日	水 ヨーク大学2日目	
3月2日	木 ヨーク大学3日目、昼頃鉄道でロンドンへ	IBIS LONDON EARLS COURT
3月3日	金 9:55 ヒースロー発	
3月4日	土 9:00 羽田着	

プログラムの詳細は6章で後述する。

4 英国の概要

4-1 英国の基本情報

正式名称：グレートブリテンおよび北アイルランド連
合王国

人口： 6750 万人(2022 年)

面積： 24.3 万 km²

宗教： 約 60%がキリスト教、
約 25%は信仰を持っていない

通貨： スターリング・ポンド

政治体制： 立憲君主制



図 4.1

4-2 産業

北海油田により、石油とガスがイギリスの総一次エネルギー需要の 3/4 以上を占め、先端産業では航空宇宙産業、医薬品産業、自動車産業で最先端技術を有する企業が複数ある。GDP は世界 6位(2022 年)であり、ロンドンには世界有数の金融センターがある。金融街シティ・オブ・ロンドンはヨーロッパの古い街並みが残されている他の地域とは異なり、ガラス張りの高層ビルが立ち並び、ロンドンにいることを忘れてしまうような、近代的な風景だった。しかし、EU 離脱による EU 各国との貿易の不安定性が問題となっている。

4-3 イギリス及びロンドン、ヨークの地理

イギリスは年中偏西風の吹く国で、典型的な西岸海洋性気候の国である。偏西風の影響でほぼ一定の降水量が毎月続くが、年降水量そのものは日本よりかなり少ない。

冬でも湿潤で滞在期間中では一日一回は雨が降っていたように思えた。

4-3-1 ロンドン

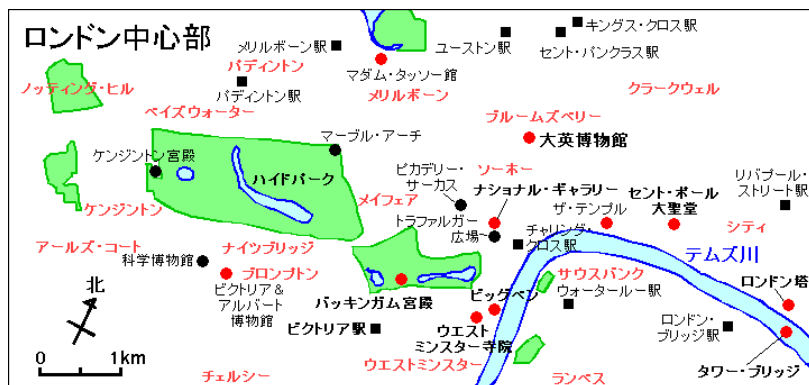


図 4.2 ロンドン中心部の地図

テムズ川河畔に位置する。テムズ川の特徴として、航行可能で、ロンドン市域を南西部から東部にかけて横切っている。郊外は第二次世界大戦後の大ロンドン計画という都市計画で、無秩序な市街地の拡大を防ぐために、グリーンベルト(緑地帯)で市街地を取り囲み、開発を規制されている。移動手段として、チューブと呼ばれる地下鉄や二階建てバスが主流である。世界で最初に開通した地下鉄であるチューブは古い路線もあり、電波が通じなかったり、狭かったりした。

4-3-2 ヨーク

ヨークはロンドンのキングスクロス駅から鉄道で約 2 時間のイングランド北部の街。ノース・ヨークシャー州にある人口が 21 万人(2018 年)、面積が 271.94 km²の都市である。ウーズ川とフォス川の岸辺に広がり、ロンドンの北 300 km に位置するため、ロンドンよりも涼しい気候である。樺太の北端とほぼ同じ緯度に位置するが、温暖で日本と同様に四季がある。地下鉄はないが、バスが充実しており主要な場所へは全てバスでアクセスできる。

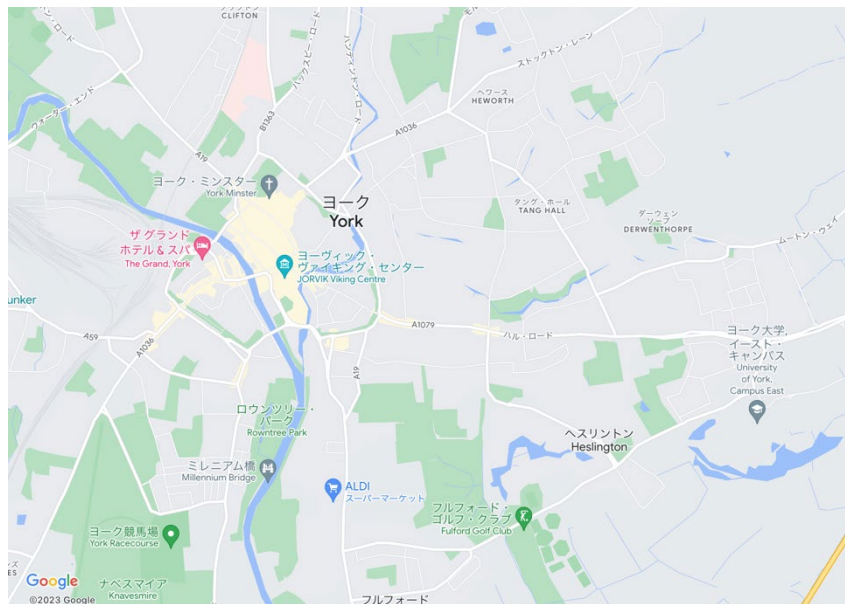


図 4.3

ヨークミンスターやシャンブルズ通りなど歴史的な街並みが残っており、「ヨークの歴史はイングランドの歴史」とまでいわれる。



図 4.4 ヨークミンスター



図 4.5 シャンブルズ通り

4-4 英国の社会・経済・文化的特徴

「人種のるつぼ」と表現されるように、イギリスには多様な人種が住んでおり、様々な国からの観光客がいた。マイノリティに対する差別が全くないわけではないようだが、私は差別を受けるどころか多くの優しさに触れることができた。

レストランや洋服屋、雑貨屋などに入ると必ず店員が笑顔で挨拶をしてくれる。「日本から来た」と

伝えと、「こんにちは」や「ありがとう」などの知っている日本語の単語を披露してくれるフレンドリーな人もいた。英語の文法や発音に自信がない場合でも、はっきり自信を持って話すことで、自分の伝えたいことの大部分は伝わるため、積極的にコミュニケーションをとるべきだと思う。

そして、今回の滞在で特に印象に残っているイギリス文化は、軽食と芸術である。

大学や研究機関に訪問した際には決まって飲み物と軽食が振る舞われた。飲み物は水やコーヒー、紅茶、牛乳、ジュース、そして軽食はチョコレート、クッキー、さらに丸ごとのフルーツ(りんご、オレンジ、バナナなど)と多種多様であり、自分の好みのものを選ぶことができた。ただしこの時、皿などの容器はないことが多く、大きめの紙ナプキンに包むことしかできなかった。

そしてロンドンの街中にはたくさんの美術館や博物館、そして画廊があった。美術館や博物館のうちの多くは無料で見学することができるため、観光客を含む多くの人々が訪れていた。街中にあるたくさんの画廊では、美術館に比べて現代的なアートが数多く展示されていた。素人目にも、作品や内装からそれぞれの画廊の雰囲気の違いを何となく感じとることができた。

また、チップと水の値段についてとても印象に残っている。

海外でサービスを受ける時に必要であると言われるチップについては、想定していたよりもシンプルだった。毎回チップの額を計算して支払わなければならないと思っていたが、私が行ったレストランではいずれもサービス料 10%程度を含んだ額が設定されていたため、指定された金額を支払うだけで良かった。ただし、メニューに記載されているのは消費税のみを含んだ金額であり、サービス料は含まれていないことに注意しなければならない。

一方で水については悩まされることが多かった。まず水は、無料の tap water(水道水)も有料の still water(ミネラルウォーター)も注文しない限りは出てこない。ロンドンの水道水は日本と同様にそのまま飲むことができるらしいが、万が一お腹の調子を崩したら大変だと思い、still water を注文するようにしていた。still water は大きな瓶で提供され、3~4人分で4~5ポンドとかなり高価だった。



5 事前学習について

本プログラムでは、渡航前の12月から事前学習を4回行った。それぞれの節で、詳しく述べる。

5-1 12/7 (水)

第1回目の事前学習は、12/7の午後に行われた。まず顔合わせとして、2人または3人1組になって他己紹介を行い、係役割を決め、スケジュール確認と、小林先生によるUKの歴史と紋章についてのレクチャーがあった。デザインであつたりとても複雑な歴史があつたりと日本の家紋とは違った面白さ、奥深いところを知ることができ、とても良い機会となつた。

5-2 12/21 (水)

第2回目の事前学習は、12/21の午後に行われた。この回では、UKに関して何か好きなこと気になったことなどUKに関わるものであれば自由に参加者各自で調査し、そのプレゼンテーションを行なつた。また、筆者の考えにより、各自の自己紹介も簡単に入れてもらった。質疑応答2分以上含めて合計6分という短い時間の中、さまざまな面白い発表が聞けてとてもよかった。著者は、ロンドンの空港に関するプレゼンを行い、他にも、観光地やハリーポッター、食文化、アーサー王などさまざまなテーマがあつた。

5-3 1/11 (水)

第3回目の事前学習は、年が明けた1/11の午後に行われた。この回では、ヨーク大学から東工大に留学に来ている学生2人（AnyさんとJackさん）によるヨークとUKに関するプレゼンをしてもらい、その後、フリートークをした。その中で、参加者はそれぞれいろいろなことを質問して、いろいろなお話を伺つた。



図5 訪問先についてプレゼンする様子

5-4 2/13(月)

第4回目の最後の事前学習は、2/13の午後に行われた。現地で行う予定のプレゼンテーションのリハーサルを行った。B4は学士特定課題研究の発表を、それ以外の参加者は日本や東工大に関する発表をした。学士特定課題研究の発表では、ほとんどのB4が論文の締め切りが迫る中、急いでプレゼンを作ったためではあるが、小林先生にいろいろなアドバイスをもらい、良い機会となった。日本や東工大に関する発表では、それぞれとても面白い着眼点であり、終始良い雰囲気で行なった。また、渡航の際の注意等の最終確認を行い、その後、リーダーの提案により参加者だけで自由な時間を過ごした。お互いに、研究の話をしたり、現地での自由時間の計画を立てたり、よくわからない手続きを質問しあったりと、とても有意義な時間であった。

6 訪問先の詳細

6-1 NPLについて

6-1-1 概要

イギリス国立物理学研究所(National Physical Laboratory)の略称であり、ロンドン郊外に位置する1902年設立のイギリス国立の計量標準研究所である。NPLでは、外部の企業の器具の製作や校正と測定のサービス、物質の構造の理解、X線を使ったコンピューター断層撮影、製品の強度測定、そして専門家の育成などの研究以外の様々な活動も行なっている。例えば、病院からデータを受け取り、分析を行っている方もいた。これ以外にも一般の人向けに科学に興味を持てるようなイベントも開催しており、たくさんの方が科学に興味を持つような機会を提供している。

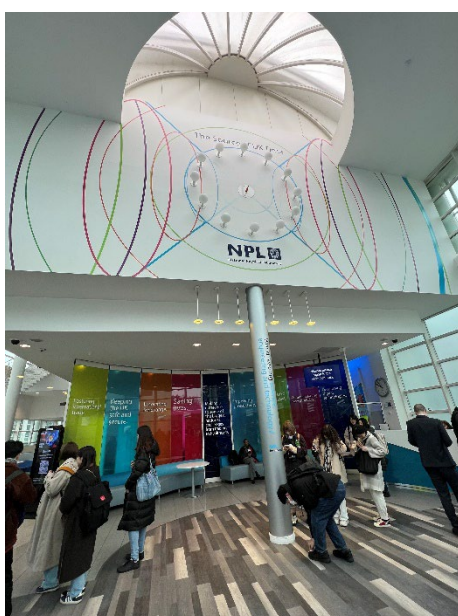


図 6.1 NPL 本館

6-1-2 見学内容

NPLでは、まず研究紹介があった後、B4の5人による学士特定課題研究の発表を行い、昼食を経て、最後にNPLの軽い説明とNPLでのPhDについての話があった。

研究紹介では、放射線治療と伝達物質のイメージング技術の3つの研究についてそれぞれの実験室に移動して説明をしてもらった。それぞれの研究紹介では、学生自ら質問してみるといった積極的な姿勢が見受けられた。

次に、東工大生の研究発表があった。これは次章で詳しく述べる。昼食は、サンドイッチなどの軽い食べ物を立食形式でいただいた。先ほど来てくださった研究者の方々とお話ししながら食べている人や、発表の緊張から解かれて笑顔が多くなった人などリラックスした楽しい時間を過ごした。

最後の説明は、まずNPLについての説明を行った後、NPLでのPhDについての話をし

もらった。NPL にとって、PhD が身近な存在であることや、日本よりも環境が良さそうなど様々なことを知ることができた。

6-1-3 東工大生の研究発表

学士特定課題研究の発表では、発表のみならず、質疑応答まで英語で行い、そして、国際的にも評価されている中核的研究機関の方々に聞いてもらえるという滅多にない機会にどの学生も緊張していた。また、それぞれの研究タイトルが、「首都圏空域における航空管制の言語運用分析」、「宇宙線ミュオンを用いたイメージング技術の基本特性」、「Vision transformer の量子化と枝刈りの一考察」、「超電導コイルのための極低温冷媒システムの研究」、「Structural changes in Au nano particles by “Repeated Solid-State Dewetting”」となっている通り、研究トピックや分野がとても異なるなか、聞きにきてくださった研究者の方々に質問してもらい、なんとか応答した。著者は、ここで質疑応答がうまくいかず、自分の英語力の無さを実感した。

6-2 Imperial College London について

6-2-1 大学概要

インペリアル・カレッジ・ロンドン(英語:Imperial College London、略称:ICL)はロンドンにある大学である。世界大学ランキングでは、QS 世界大学ランキング2023で世界第6位、THE 世界大学ランキングでは2023で世界第10位である。ヨーロッパではオックスフォード大学、ケンブリッジ大学に続く第3位となる。

1) キャンパス

インペリアルはロンドンの中心部であるサウジケンジントンに主キャンパスを持ち、ほとんどの学部生および大学院生の活動がここで行われる。ロンドンの地下鉄から見ると Zone1にある好立地であり、周辺に自然史博物館、科学博物館など多くの博物館がある。

サウジケンジントンキャンパス以外に、ロンドンで最も急速に変化している地域の一つであるホワイトシティに新しいキャンパスが建てられた。このキャンパスは研究を中心として建てられ、建物はとても現代的で主に研究者と大学院生が使っている。また、政府からの支援金以外に、当地工業からの資金も大事なので、ホワイトシティキャンパスは住民たちとも深く連携している。

インペリアルは医学部を持つので、以上のメインキャンパスのほかに多くの病院をキャンパスとしている。

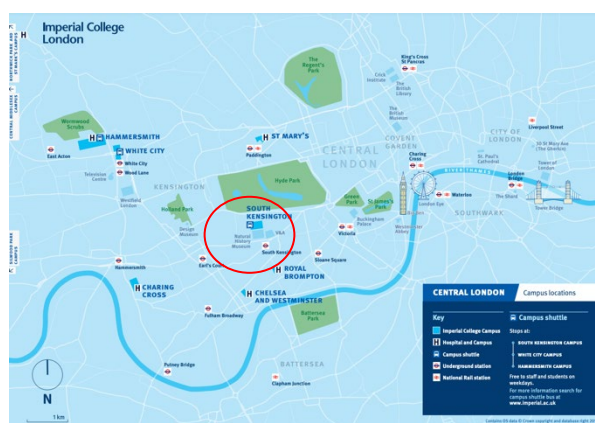


図 6.2.1 ICL のキャンパスマップ

(赤丸:ロンドンの中心部にあるサウジケンジントンキャンパス)

2) 学部と学生

インペリアルは工学部、医学部、自然科学部とビジネススクールの四つの学部から構成される。東工大と比べると、理学院と生命理工学院は自然科学部と対応し、インペリアルの工学部は東工大の情報理工学院、工学院と環境社会理工学院の全ての専攻を含む。それ以外に、医学部とビジネススクールは東工大にない専攻である。

学生数に関しては、インペリアルでは学部生が約10,000人、大学院生が約 9,000 人である。学生の中では、イギリスから入学した学生が40%を占め、残りの60%が留学生である。

3) インペリアルと日本

インペリアルには75人の日本人学生と37人の日本人スタッフがいる。過去5年間に、インペリアルの研究者と日本の研究者が1,000以上の論文を共著している。また、インペリアルは日本の東京大学、京都大学、東京工業大学、大阪大学、理化学研究所、JAXA と JST など、さまざまな高等教育機関と協力している。

6-2-2 訪問内容

10:00-11:00 インペリアル大学サウジケンジントンキャンパスに着き、リフレッシュお菓子やコーヒーをもらい、インペリアルの大学紹介を聞いた。その後、チーム分けして、イギリスに関するクイズを10問出題され、みんなでディスカッションしながら答えた。

11:00-12:00 インペリアルの学生大使による大学ツアー。学生大使は大学のバイトの一種であり、ロンドンのバイトの平均時給の£9に対して、£13がもらえる。ツアールートは Main Entrance →City and Guilds→Sir Alexander Fleming→Dangoor Plaza→EEE Main Entrance→Dalby Court→Royal Albert Hall→Beit→Princes Gardens



図 6.2.2 Exhibition Road にある Main Entrance 図 6.2.3 Royal Albert Hall
(有名なコンサート会場、卒業式はここで行う)



図 6.2.4 Beit 図 6.2.5 Princes Gardens
(学生寮、費用は一週間£187~£272となる) (学生活動施設:ジム、プール、食堂など)

12:00-13:00 ランチと東工大生の発表

13:00-13:45 材料系のラボツアー。実験室と実験設備をいろいろ見学した。東工大の研究室ごとに施設を持つのに対して、インペリアルは施設を一つの実験棟に設置し、異なる実験室の全ての人が使用できるようにしている。また、東工大では研究室が教授や学生の居室の隣にある場合が一般的であるが、インペリアルでは、研究室と居室が別々になっている。

14:00-14:40 学生フォーミュラに参加するサークル Racing Green の Pit Garage の見学。車の製造の原理や車のモデルを見学した。バッテリーから試乗の話にわたって、車に関する知識を幅広く聞いた貴重な経験であった。

14:40 Q&A

6-2-3 東工大生の発表内容

東工大生7人は2グループに分けて、それぞれ東工大、日本文化について紹介した。東工大に

については建物、学院構成と東工大生の 1 日の三つの部分に分けて紹介した。日本文化については、基本情報、日本の名所旧跡、祝日、高速道路のサービスエリアと留学生からみる日本のいくつかの部分に分けて紹介した。インペリアル 학생がたくさん来た。



図 6.2.6 ICL での発表の様子

6-3 Queen Mary University of London について

6-3-1 概要

Queen Mary University of London はロンドンの東部に位置しており 1785 年創設の歴史ある大学である。最寄りの駅は、Stepney Green 駅で徒歩 6 分ほどのところに位置している。Queen Mary University of London は、ロンドン大学の中で 3 番目に大きく、寮が多いこともあり、留学生も多く非常に国際色豊かな大学である。長年、留学生を多く受け入れてきた歴史があり留学生に対する支援が充実している。また、ノーベル賞受賞者を過去に 9 人輩出していることやラッセル・グループに属しているため国内外で研究型公立大学として幅広く知られている。さらに、数多くの企業と協力していて、F1 のウィリアムズやマクラーレンなども協力している。強みのあるエリアとして材料系などが挙げられる。ロンドンの東部に位置していることもあり、生活費が安い傾向にある。



図 6.3.1 QMUL の学生のプレゼン

6-3-2 訪問内容

Queen Mary University of London では、Queen Mary University of London について、説明を聞いたのち、主に 4 人の PhD 課程の研究発表、Queen Mary University of London の見学をさせていただいた。研究発表では、天然ゴムについての研究や、カーボンについての破壊サイクル、触媒的不斉合成についてなどであった。最先端の研究発表で刺激を受けると同時に、英語力が足りず理解不足なことも多くあり課題が浮き彫りとなった。また、日本よりも PhD が取得しやすかった。研究発表してくださった方も留学生がおり、留学生の多さを感じた。Queen Mary University of London の、施設見学では、かつてはシアターとして使われていた講義室や、非常に開放的な学生実験室などがあり大変魅力的であった。図書館は特に、大きく歴史を感じ、魅力的な空間の一つであった。また、個人的に大学内に墓地があったり、歴史ある建造物が利用されていたりと街に大学が溶け込んでいて興味深かった。ロンドンの中心部から少し離れていることも自然も多く、のどかで過ごしやすかったと感じた。さらに、どこか施設に東京工業大学らしさを感じるところがあり、数名の学生が親近感を感じていた。



図 6.3.2 QMUL のキャンパスツアー

6-4 ヨーク大学

6-4-1 大学概要

ヨーク大学(英語: University of York)は、イギリスノース・ヨークシャー州ヨーク市に本部を置くイギリスの公立大学である。ヨーク市はイギリスでも長い歴史を誇る町だが、1963年創立したヨーク大学はイギリスの大学の中では若い部類に属する。そのため、1959年に創立したカナダの York University に先を取られ、University of York と名付けられた。しかし、オックスフォード大学(英語: University of Oxford)とケンブリッジ大学(英語: University of Cambridge)の英語名から見ると、イギリス大学のネーミングセンスを継承しているとも言える。

ヨーク大学のキャンパスは Campus East と Campus West の二つあり、今回のプログラムで滞在したのが Campus West であった。Campus West が最初のキャンパスであり、文学系学部と理工系学部が位置している。対して、Campus East は新しいキャンパスで、法学部と商学部、そして先端なコ

ンピューターサイエンス学部がここに設置されている。



図 6.4.1 Campus West の代表的な噴水景色

また、日本と異なり、イギリスの学生は所属する学部と並行して、カレッジ (College) にも所属している。正にハリーポッターにあったカレッジと同感覚で、学生はカレッジに対する所属意識がとても強く、入学時にカレッジのイメージでカレッジを選び、3年間の学部生活でカレッジの色に濃く染められていく。

学内にたくさんの動物が生息しており、特に鴨が代表的である。中に Longboy という立ち姿が特徴的な鴨が Instagram で多くのフォロワー数を保有している。

6-4-2 ヨーク大学 1 日目

1) 朝食



図 6.4.2 Vanbrugh college の朝の食堂

滞在する Vanbrugh college の食堂は朝 8 時から営業開始するが、利用者の多くは交換留学生の様な方が多く、本学の学生が少なかった。その理由は食堂の利用料が高いからである。ランチも同じく、多くの学生が節約志向でランチパックを持参している。

朝食の内容はスクランブルエッグ、ベーコン、マッシュルームといったクラシックなブリティッシュ朝食である。スタッフに欲しいものを伝えて皿に乗せてもらう、最後に会計する流れが東工大とほぼ同じだが、コーヒーとスライspanが無料のセルフサービスである。

2) オリエンテーションと研究室見学

ヨーク大学の初日はオリエンテーションから始まった。ヨーク大学のスタッフが自己紹介をして、プログラムの流れについて語った。その後2グループに分かれて Environment & Geology と Biology の部門見学をした。Environment & Geology 部門では、ヨーク大学が提供する環境科学の

コースと地球環境を考慮した施策が紹介された。Environment 部門の建物の外壁が植物に覆われており、環境保護の理念を体現している。次の Physics & Engineering 部門では、再生可能エネルギーのイギリスにおける応用を紹介した。大まかな概念ではなく、再エネにおける現実的な問題を踏まえた講義はとても印象深かった。



図 6.4.3 オリエンテーションの様子と Environment 部門の外壁

昼食の後は、Chemistry 部門の見学である。ヨーク大学はグリーン科学に力を入れており、そのための施設の内部を見学させてもらった。中にはとても大きな学生用の実験室があり、100 人以上の学生がきれいな化学実験室で実験している光景に驚きを感じた。最後に、Interdisciplinary Session では Metaphor(比喩表現)に関するレクチャーがある。教育スタイルを Warehouse worker, Gardener, Shepherd, Air-traffic controller の四つの職業の例えから始まり、各言語における比喩現象を通して認知言語学についても触れた。非常に分かりやすく、最初から最後まで展開がスムーズだった。



図 6.4.4 Interdisciplinary Session

レクチャー終了後 Welcome event があり、学生はそれぞれのメンターと対面する機会があった。そこでお土産の交換をして、お菓子とコーヒーを楽しみながら語り合えた。イベント終了後もキャン

パス内のパブに赴き、そこで続きの話を学生とメンターもいた。

6-4-3 ヨーク大学 2 日目

1) メンターと行動

ヨークでの 2 日目の午前のプログラムはメンターとの交流である。メンターは東工大生 2 人につき 1 人のヨーク大生が付いてくれて一緒に講義を受けたり街を観光したりした。私たちのメンターは Will という Physics を専攻している 3 年生の学生だった。彼はこの日たくさんの講義を取っており、私たちは彼と一緒に Material, Cosmology, Quantum Computing の 3 つの講義を受けた。東工大とは異なり、ヨーク大学の一コマは 60 分であるため講義そのものは短く感じた。私は機械系専攻であるが、Material の講義は似た内容を学んだことがあったので大部分は理解でき面白かった。しかし、Cosmology と Quantum Computing は専門用語や文字に慣れていなかったためあまり理解できなかった。これらのヨーク大学の講義を受けて、改めて専門用語の英語に触れることの重要性を感じた。教授が話す英語のスピードは十分に聞き取れる速さであるため、単語を勉強していれば講義についていけると思う。また、海外の学生は積極的に質問すると思っていたが 3 つの講義を合わせて 1 回のみ学生の質問があった。しかし、教授が話している間に挙手をして質問するところはやはり東工大の学生とは違うと感じた。



図 6.4.5 講義中の様子

この日の昼食は今までの朝食・夕食の場所ではなく、Derwent Bar and Restaurant でメンターと一緒に食べた。Buddha Bowls という肉類と 5 種類のサラダ、ソースを自分で選んで最後にパンを乗せた £5.95 のメニューである。この昼食は事前にヨーク大学へ払った費用に含まれているため、Food Voucher というチケットで £7.50 まで買うことができた。



図 6.4.6 昼食の様子

2) Professor David Jenkins による Nuclear Physics の講義

午後には3つのプログラムがあった。最初は Professor David Jenkins による Nuclear Physics の講義である。一コマ 60 分の講義で内容は放射線を検知するための機器についてであった。私は機械系の科目で原子工学概論を受講していたため理解しやすかったが、専攻が違う生徒にもわかりやすく話していただいた。放射線を検知するウェアラブルな端末が核爆弾の発見を想定していて、スケールが大きく面白かった。

3) 教育について話し合い

次のプログラムはヨーク大生と教育について 4-5 人のグループに分かれて話し合った。テーマが教育であるため。大学の年数や受験方法、学ぶ科目の種類の違いなどについて意見を交換した。また、プログラム 1 日目に学んだ Metaphor も題材として取り上げられ、自分がこれまで受けてきた教育が Warehouse Worker, Farmer, Sheperd, Air-traffic controller のどれに近いかを考え自分の意見を述べた。そして最後に、今の教育をどのように変えたらより良くなるかについて考え、大学の社会人課程の充実やジェンダー平等、日本の英語教育といった意見が挙げられた。

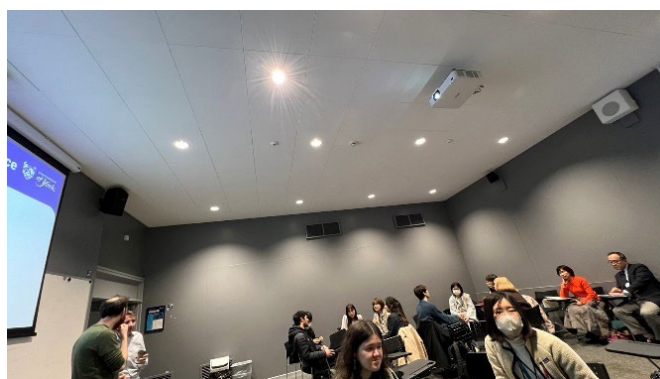


図 6.4.7 ヨーク大生と教育についての話し合い

4) Japanese Society の方々とクイズ

最後のプログラムはヨーク大生の Japanese Society の方々が用意してくれたクイズを数十人で楽しんだ。1 グループ 4-6 人程度に分かれ、英国についてのクイズや日本人でも答えることが難しい日本についてのクイズを楽しんだ。東工大生があまり学んでいない歴史・公民分野の問題が多かったが皆それぞれ知識を持っていてさすがだなと感じた。



図 6.4.8 クイズを楽しむ様子

6-4-4 ヨーク大学 3 日目

ヨーク大学での三日目、私たちのプレゼンテーション、留学経験談と研修修了証書の交付が行われた。プレゼンテーションは 1~3 年生が東工大と日本を紹介し、インペリアルと同じ内容で、何度も練習して上手になっているが、設備の問題で途中数秒間詰まってしまい少し残念だと感じた。そのあと、ヨーク大学からの研修のまとめとして、ヨーク大学の簡単な紹介(キャンパス、学部、キャンパスライフなど)、留学したいならば必要な手続きと以前の留学経験談を行った。ヨーク大学の院生になるために、GPA は 3.0/4.0 以上、IELTS6.5 の成績が必要。最も驚いたのは学費である。日本での数倍で、イギリスの物価と家賃を含めたらかなりの負担になると思った。最後に、研究修了証書の交付である。たった 4 日間の超短期派遣でしたが、ヨーク大学から修了証書をもって、とても嬉しいです。証書は黄色っぽい色の紙で、みんなはとてもいい感じだと思った。



図 6.4.9 修了証書の交付の様子

ヨーク大学でのプログラムが終わり、昼ごはんを食べた後ロンドンに戻った。ロンドンに帰ったら、フリータイムでまちのどこかに行き、イギリスでの最後の時間を過ごした。

6-4-5 ヨーク大学の寮

本来のプログラムではヨークでホームステイをすることになっていた。しかし、エネルギー高騰などの要因によりホームステイ先が足りなくなりホームステイできなかった。一方、そのかわりとしてヨーク大学の寮を使わせていただいた。



図 6.4.10 ヨーク大学の寮 外観

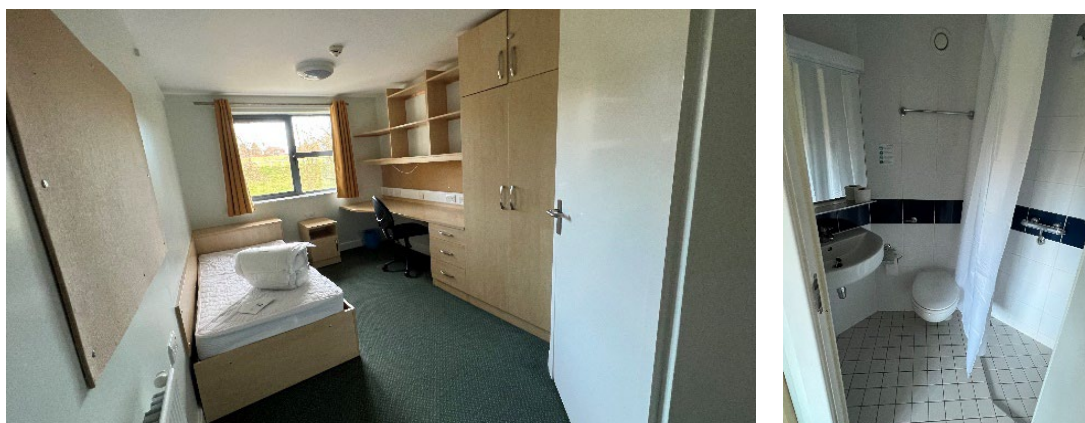


図 6.4.11 ヨーク大学の寮 内観



図 6.4.12 共用のキッチンスペース

ヨーク大学の引率の方によると、この寮は以前 PhD の学生が住んでおり彼らが卒業したため今は空いているそうだ。建物内は非常にきれいで各自の部屋も約 8 畳+バスルームがあり。南品川にある東工大の学生寮より大きかった。共用のキッチンスペースでは 4 つの冷蔵庫と 2 つのキッチ

ンがあり広々としていた。ここで皆で集まって食事をするのも楽しそうだと感じた。ヨーク大学内にスーパーマーケットがあることを考慮すれば、この寮で自炊して生活するのは東工大より楽そうだ。しかし、月々約 12 万円賃料がかかるといわれたときは、駅から離れているにもかかわらず東京以上の地価の高さで驚いた。

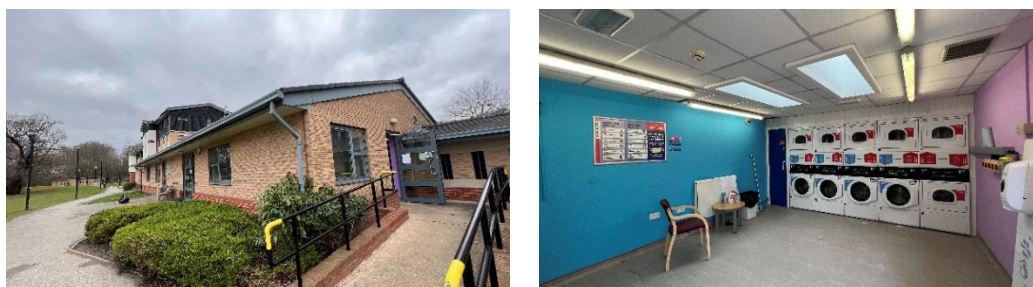


図 6.4.13 ヨーク大学のコインランドリー

ヨーク大学の寮では洗濯は上図の建物にあるコインランドリーで行った。洗濯には専用のアプリを入れる必要があり料金はクレジットカードで払った。しかし、洗濯 30 分で£3.2、乾燥 1 時間で£1.7 かかるため(合計約 830 円)たくさんの洗濯をまとめてやるか友人と一緒に洗うのがよさそうであった。

6-4-6 東工大生の発表内容

発表内容はインペリアルと同じく、30 分のプレゼンテーションは、前半東工大、後半日本を紹介することである。同じ内容は二回発表するが、みんなが両大学で発表を経験できるため、発表資料エディターの議論の結果、このような形で実施することになった。東工大の紹介では、東工大の基本情報と学生二人のキャンパスライフを紹介し、日本の紹介では、日本に関する三つのポイントと留学生の日本で生活する経験を紹介した。何度も練習を重ねた結果、みんな緊張することなく、とても良い発表ができた。設備の接続の問題で途中数秒間詰まってしまったが、それでもこのイギリスでの最後のプレゼンテーションは無事に終えることができた。



図 6.4.14 東工大生のプレゼンの様子

6-5 日産自動車

6-5-1 日産自動車概要

日産自動車は 1933 年に設立された日本の多国籍自動車メーカーであり、自動車の製造、販売

などを行っている。日本だけではなくアジア、アメリカ大陸、欧州、アフリカなど世界中に事業所を置き、グローバル販売台数は 405 万台になっている。また、各社の強みを活かし競争力と利益性を高める目的から、ルノー、三菱自動車工業とルノー・日産・三菱アライアンスを形成している。日産自動車では電気自動車の生産に取り組んでおり、現在では日産リーフ、日産アリア、日産サクラの三種類の完全電気自動車が販売されている。

6-5-2 英国日産自動車製造概要

英国日産自動車製造会社は 1984 年に設立された。イギリスの自動車産業は主に南部で行われている中で、英国日産自動車製造会社はイングランド北東部のサンダーランドに工場を有する。この工場はイギリス最大の自動車工場となっており、リーフ、キャシュカイ、ジュークなどの製造を行っており、年間で約 44 万体の自動車の製造を行い、154カ国に輸出している。特にキャシュカイはイギリス内で品質が評価されており、2022 年のイギリス内での年間販売台数で首位となった。従業員は約6000人で、6人の日本人の方がこの工場に働いているとおっしゃっていた。また、太陽光発電や風力発電を取り入れて工場に必要な電力の一部を発電することで、生産段階から環境に配慮した自動車製造を行っている。その他の環境に配慮した取り組みとしては、EV の生産、再生可能エネルギーの利用、生産時の二酸化炭素排出削減、隣接する工場と電気を分け合うなど、カーボンニュートラルへの取り組みのビジョンとして「EV36Zero」を掲げている。また、英国日産自動車製造会社では人材育成にも力を入れており、大学卒業から就職までの間にインターンのような期間を設け、年間約 5000 人がこのプログラムに参加している。また、子供向けのプログラムも用意し、体験学習などを通して、自動車産業に興味を持つ子供が増えるように取り組んでいる。

6-5-3 訪問内容

今回の訪問では、日本人の方が対応してくださり、まず英国日産自動車製造会社について説明を受けた後、自動車製造ラインを見学し、質疑応答などを行った。会社についての説明では、日産自動車、英国日産自動車製造会社についての説明、環境に配慮した自動車製造の取り組みや今後の目標、人材育成の取り組みなどについて話を伺うことができた。特に印象に残っているのは、物価高や材料不足だけでなく、トラックのドライバーにウクライナ人が多いことから、ドライバー不足になっているということであり、自分が思っていた以上に世間の様々な事情が自動車製造に影響を与えているということを知った。

製造ラインの見学では、すでに完成しているドア、エンジンなどの部品を車体に取り付け自動車を組み立てる一連の流れを見ることができた。プレスや溶接など部品を製造する工程はほとんどの作業が自動化されているが、組み立てでは顧客からのオプションなどの指示があったり、細かい作業が必要であったりするため、ほとんどが人の手によって行われており、実際に見学した工場でもたくさんの方が働いていた。工場では、ドアを取り付ける人、エンジンを取り付ける人、タイヤを取り付ける人など、人それぞれ担当が決められていた。最後に車体に傷や汚れがないかなどの外装検査や内装検査、走行テストや水漏れテストなど、様々な検査が行われる工程があった。同じ空間内

でまだ自動車に部品がついていない骨格の状態から、数メートル離れたところでは既に製品としての自動車が検査されているのが印象的だった。

質疑応答では自動車製造や日産の取り組みに関するだけでなく、対応して下さったのが日本人の方だったことから、海外勤務についてお聞きすることができた。日産はアジア、アメリカ大陸、アフリカなど世界中に事業所を持っているが、今イギリスに勤務している方々も前にアフリカやアルゼンチンなど様々な国で働いた経験があるとおっしゃっており、とても興味深いお話を聞くことができた。

6-6 博物館について

ロンドンには、博物館や美術館が多数ある。どこも、地下鉄やバスなどの公共交通機関を利用すれば気軽に行くことができる。ここでは、私が実際に訪れた、大英博物館とロンドン自然史博物館の概要と、この目で見て感じたことを報告しようと思う。

6-6-1 大英博物館(The British Museum)

設立:1753年、世界初の公立の国立博物館

位置:Great Russell Street, London WC1B 3DG

(Holborn Station から10分ほど歩いて到着した。他にもいくつか経路がある。)

博物館は10時に開館するが、閉館時間は曜日によって異なるため、よく調べていくのがよい。入場料は無料であり、館内は写真撮影自由である。世界の地域ごとの展示エリアがあり、合計800万点以上の作品が展示されている。他にも、ミュージアムショップやカフェがある。私は、カフェで紅茶を頼んだが、紅茶の紙カップのデザインは、葛飾北斎の『富岳三十六景』より、「神奈川沖浪裏」であった。ちなみに、ミュージアムショップにも神奈川沖浪裏をはじめ、葛飾北斎の浮世絵を用いた商品が売られているが、大英博物館で本物の絵を観ることはできない。照明が絵に与える影響を考慮してのことのようだ。



図 6.6.1 正面玄関



図 6.6.2 紅茶の紙カップ

私は、古代エジプトエリアと日本エリアを中心に、その他モアイ像や中国の瀬戸物などを鑑賞した。エジプトエリアには、ロゼッタストーン、ファラオの彫刻やミイラが展示してある。しかしながら、世界史については不勉強であったため、正直なところ、それら展示品がかつて何に使われていたのか、何を意味していたのか、といったことは曖昧にしか分からなかった。とにかく、その外面的な美しさ、緻密さ、高い技術力、さらに、古代のものが現代にまで残っているという事実に驚き、また感動していた。

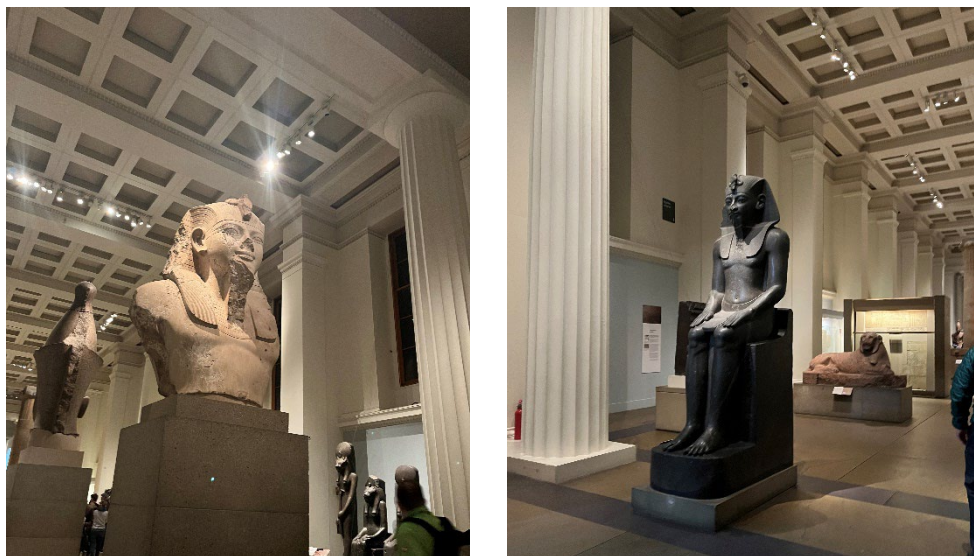


図 6.6.3 エジプトエリアの彫刻

日本エリアには、銅鐸や埴輪といった古代の実用的な道具から、水墨画、江戸時代の浮世絵、さらには現代の美術作品が展示されており、大英博物館の日本エリアを観ることで、代表的な日本の作品を目にすることができる。特に印象に残ったのは、日本エリアに展示されている、陶器が持つ曲線美である。直線とは違った美しさで、どこか自然を思い起こさせる。ふと、「自然界には直線は存在しない」というどこかで聞いた言葉を思い出した。日本エリア以外でも、世界各国の焼き物を観ることができ、それぞれの国の特徴が表れていると感じた。それらを見比べるのも面白いだろう。



図 6.6.4 日本エリアの銅鐸

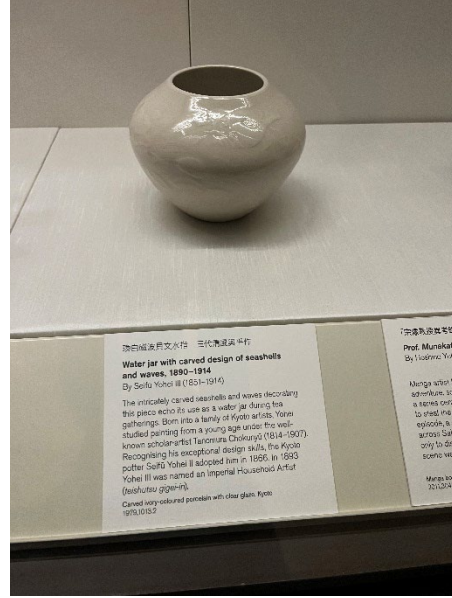


図 6.6.5 日本エリアの陶器

私は他の世界的に有名な博物館に行ったことはないが、大英博物館の所蔵数と、各展示品のレベルの高さは比較しなくとも素晴らしいものだと思った。たとえ、歴史的な知識が不足していても、本物の展示品から、それらの偉大さや、歴史、ヒトの営みを感じることができるだろう。価値ある品々を残すだけでなく、このように、本物が持つ力を人々に伝えることも、博物館の役目であるだろう。

6-6-2 ロンドン自然史博物館(The Natural History Museum)

設立:1881年(1963年までは、大英博物館の一部であった。)

位置:Cromwell Road, London SW7 5BD

South Kensington Station から徒歩5分ほどで到着する。周辺には、ロンドン科学博物館(The Science Museum)、ビクトリア&アルバート博物館(Victoria & Albert Museum)や、Imperial College Londonがある。入場料は無料で、写真撮影可能である。

大英博物館と同様に、所蔵品が非常に多く、また広い展示スペースを持つため、すべてをじっくり観ることはできなかつた。主に、生物の進化、人類の進化を中心に、イギリスで発見された化石や動物の標本、さらには、自然史研究において貢献した人物の資料が残されている。展示だけでなく、博物館の建物自体も価値あるものだ。

印象的だったのは、自然災害に関する展示である。日本で発生した、阪神淡路大震災と東日本大震災を大きく取り上げており、津波の映像のコーナーには、大勢の外国人が集まっていた。震災の被害の状況、復興の状況が、このようにして海外で伝わることは重要なことだと感じた。



図 6.6.6 ロンドン自然史博物館内の展示と建物

7 その他

7-1 食事

ロンドンにいたとき、私たちのチームはいつもホテルが提供されている朝食、ヨークにいたときは学校の食堂に提供されているものを食べていた。どちらも、朝食は伝統的なイングリッシュブレイクファーストで、ソーセージ、トースト、クロワッサン、ひよこ豆、ハッシュドポテト、マッシュルーム、ヨーグルト、オレンジジュース、ミルクなど、ヨークとホテルの朝食はほぼ同じだった。



図 7.1.1 ロンドンのホテルで提供されている朝食



図 7.1.2 ヨーク大学の食堂で提供されている朝食

イギリス有名な料理というと、フィッシュ&チップスに間違いない。私が注文したフィッシュ&チップスはこのようなもので、レストランの定番料理である。



図 7.1.3 フィッシュ&チップス

イギリス食事のもう一つ有名なものはアフタヌーンティーである。アフタヌーンティーの内容はサンドイッチ、アペタイザーのサラダ、ケーキとお茶であって、私が行っているところのお茶は飲み放題だった。



図 7.1.4 アフタヌーンティー

1日の観光が終わった後、ホテルのパブで晩ご飯をすることが多かった。ホテルのパブでもフィッ

シュ&チップスが提供されているが、私が注文したのはハンバーガーだった。パブで食事をしながら、サッカー観戦するのは地元のイギリス人の生活を実感できた。



図 7.1.5 パブの料理

7-2 町の様子

7-2-1 ロンドン市内

ロンドン中心地は、まず歴史的建築物の圧倒的な美しさが一番印象に残った。宮殿や大聖堂など、その大きさや遠くから見たデザインだけでなく、近くで見ても本当に細かいところまで凝った建築物ばかりで、多くの発見があった。これらの歴史あるとても美しい建物が、近代的なビルが並ぶエリアのすぐ近くにあり、時の流れによる科学の発展を感じた。また、ビックベン、ウェストミンスター宮殿、ウェストミンスター寺院、ロンドンアイ、首相官邸、バッキンガム宮殿、ロンドンブリッジ、ロンドン塔、ミレニアムブリッジ、セントポール大聖堂、大英博物館など多くの観光スポットが中心地に密集しており、多くの観光スポットを回りたい観光客にとっては観光しやすい街だと感じた。さらに、町中の公園でもリスや鳥など多くの動物が見られ、東京の公園とは異なる雰囲気を感じた。建物の圧倒的な綺麗さが上回るものの、町中や川の汚れや落書き、喫煙者が多いことも気になった。ロンドン到着後、地下鉄でホテルまで移動したが、日本の鉄道よりも狭い、現在電車が何駅に停車しているのかわかりにくい、電車の行き先がわかりにくい、圏外になってしまう、電気が点滅していても誰も気にしない、椅子が硬い、バリアフリーが進んでおらず階段が多い、という印象を受け、改めて日本の鉄道のきれいさを認識した。

一方、ロンドン郊外については、NPLがある Teddington は、のどかな風景で戸建ての家が多く広々としており、ロンドンの中心地とは全く異なる雰囲気であった。人が少なく、犬にリードをつけずに散歩している人が多く、日本との違いを感じた。

総じて、ロンドン中心地の街並みは、イメージ通り！という感じだったものの、ロンドン内でも街並みの様子はかなり異なり、様々な駅で降りるのが楽しかった。



図 7.2.1 ロンドン市内



図 7.2.2

7-2-2 ヨーク市内

ロンドンと比較するとほぼ全ての建物が歴史を感じる古くからのもので、多くが3階建て程度の低層建築であり、とても落ち着いた雰囲気の町だった。ヨーク中心地は、いわゆるおしゃれなヨーロッパといった感じで、とても写真映えする街並みだった。川が流れており、かわいい船が浮かんでいたり、その川を渡る橋もとても歴史を感じるデザインで、町全体の外観に統一感を感じた。

日曜日に中心地へ食事をしに行ったところ、17時の時点ですでに多くのお店(感覚的には80%程度)が閉まっており、町全体が暗くて人通りも少なく、1人で歩くには少し怖いと感じた。イギリスは日本と異なり治安が悪いため店じまいが早いのではないかと同じプログラムの人と話していたが、後ほど University of York の学生に尋ねたところ、日曜日だから早いだけで平日はもっと遅くまでやっているとのことだった。日本では曜日によって閉店時間が大きく変わることはあまりないため、文化の違いを感じた。実際のところ、ヨークの治安はとても良く、現地の日本人交換留学生によると、日本くらいの治安の良さで、椅子に荷物を置いて席を立っても大丈夫なくらい、ということだった。

ロンドンに比べるとゴミは少なくきれいだったものの、日本に比べるとゴミが目立ち、改めて日本のゴミの少なさを感じた



图 7.2.3

8 所感

8-1 物質工学院 学士1年

超短期海外派遣プログラムに参加し、イギリスで生活する中で、自身の至らなさを感じる瞬間が多々あった。特に、英語でのコミュニケーション能力の不足と、自分自身について語る力の不足である。

英語力に関して、リスニングは、一回で聴き取れなくても、「Sorry」と言って聴き取れていないことを相手に伝えれば、繰り返し言うってくれるため何とかなる。だが、スピーキングでは、言葉がすぐに出てこないことが多く、自分の考えを相手に納得のいく形で伝えられず、もどかしく、また情けなく感じた。コミュニケーションの手段として、英語を使いこなし、日本人以外の人とも自由に会話できるようになりたいと強く思い、英語学習へのモチベーションが高まった。

自分自身のことを語る力の不足は、ヨーク大学の学生や、日本からの留学生と会話する中で実感したことだ。コミュニケーションをとる際、自分が相手に興味を持ち、相手のことを知ろうとすると、当然だが相手も自分に興味を持ち、様々な質問をしてくれる。その時に、自分が好きなもの、好きなこと、あるいは専攻など、自分のことなのに、なぜ好きなのか、なぜそれを勉強しているのか、日本語でも英語でも、説得力のあるまともな説明をできなかったのだ。振り返ってみれば、自分の趣味趣向にはそれぞれに確固とした理由がある。だが、それをうまく言葉にできない、いや、これまで言葉にする練習をしてこなかったのだ。おそらく今までは、「なんとなく」や、簡単な一言で説明を済ませていたのだろう。日本では自己主張しすぎることはあまり好意的に思われなくてもあるが、イギリスでは逆に、自分のことを語れなければ、相手は興味を失う傾向があるように見えた。これは、イギリスに行って現地の人と関わることで気づけたことだ。自分自身をよく観察し、他者に伝えられるように訓練していきたいと思う。

以上のように、このプログラムを通じて、自分の足りない点と、今後取り組むべきことを見出すことができた。さらに、このプログラムは将来について考えるきっかけともなった。ヨーク大学で出会った日本からの留学生は、学部1年生の私に対し、留学に少しでも興味があるのであれば、学部2、3年の間に半年から1年の留学をすることを勧めてくれた。正直なところ、イギリスへ出発する直前は、海外での生活に対する不安や緊張が大きく、安全な日本にいたいとも思った。しかし、実際にイギリスで約10日間生活すると、上記にあげたように、日本には気づけない点に気づくことができた。また、ヨーク大学での学生生活を体験し、学生の自由で活動的な雰囲気と、自然に多様性が受け入れられている開けた空気感が気に入り、長期的な留学も視野に入れるようになった。これから、頂いたアドバイスを参考にしつつ、将来に対する考えを深め、行動していきたい。

最後に、小林先生、一ノ瀬さんをはじめとし、このプログラムに携わってくださった先生方、一緒に参加してくださった先輩方、イギリスでお世話になったすべての方々に、心より感謝申し上げます。

8-2 建築学系 学士2年

友たちがこの海外研修に参加したくて誘われて、私も海外に行くことに興味があって、将来海外で勉強するかもしれないと思い、今回のイギリス超短期派遣に参加した。人生二回目の海外経験、

大学のプログラムで、普通の海外旅行と比べてたくさんの経験と発見があった。

まずは、イギリスのまちの雰囲気存分に味わえた。道路上のフン、信号を無視するイギリス人、地下鉄の標識のデザイン、ヨーロッパらしい古典的彫刻、常に古い建物を維持・修理する工事、一見同じように見える古い建物はどうしても見飽きない、田舎の多くの建物の屋根はソーラーパネルを張っている。街の外観は実はこのような細かい部分で構成されている。建築の先生はいつも私たちに海外に見に行ったりしたりしたほうが良いといわれるが、これはまちの様子をテキストみたいに見ようとするのではなく、本当の海外の生活を感じるのだと今は思っていた。都市・まち・建物の基本は人と暮らし。授業で先生が強調したものは日本と異なるイギリスでもう一度強く感じた。

今回の研修で起こった最も不思議なことは、スマホが盗まれた。イギリスは日本と違い、住んでいる民族が複雑で、出発前にも盗難に注意するように言われた。ここでは、海外の危険を強調するだけではなく、少し自分の考えを言いたい。友たちとパブで飲んでいるとき、急にひとりの女が近づいてきた。あの時最初に頭に浮かんだのは、これが伝説のロマ族(いわゆるジプシー)なのか、ということであった。ロマ族がどんな人たちか知らなかったし、調べたこともなかったが、本当に一瞬に浮かんで、気づいたらスマホを盗まれてしまった。ナショナリズムを完全に避けることは難しい、ある個人の行動がその民族に対するステレオタイプにつながることも考えられる。もっと他の民族と接し、良くも悪くも相手を知ろうとし、知れば知るほど、対処や予防がしやすくなるはず。今回は悪いことに会い、逆に、これは本当の海外かと実感した。日本は安全すぎ、この世界にまだまだ私の知らないところがたくさんある。やはり外に出て知りたい。これも今回のイギリス超短期派遣で最も印象に残った点である。

学校のプログラムで普通の観光と違い、イギリスの大学、教育と触れ合い機会があった。イギリスの大学は本当に素敵で、大学の雰囲気も最高でした。さすが近代科学の発祥の地だとしか言えないが、イギリスで博士までに勉強する学生たちは少なくないということに衝撃。私のイメージの中で、日本の学生たちはあまり博士に進学する思いがなくて、なぜなら、研究するより早く社会人になって稼ぐのはより大事なことだと考えられるからだ。意味のない思考に時間を費やす欧米人より現実的であることは、東アジア文化圏に共通する特性である。もちろん日本で博士になるためイギリスより時間がかかるけど、私は今回のプログラムで博士になりたいということまで至っていないが、研究を楽しめるならば博士になることも悪くはないと思い始めた。

8-3 融合理工学系 学士2年

私には明確な将来の目標などなく、暗記が苦手だからという安直な理由で理系を選び、自分の学力との兼ね合いで東工大を第一志望に選んだ。そして入学後も、授業内容にあまり興味を持たず、大学卒業という資格を手に入れるためだけの勉強になってしまっていた。そんな中、今回の超短期派遣を通して多くの人(その中でも特に、インペリアル・カレッジ・ロンドンの学生、ヨーク大学の教授、一緒に超短期派遣に参加した同じ系の先輩)と出会ったことで、私の価値観は大きく変わった。

インペリアル・カレッジ・ロンドン、東工大と同様に理工系に強みを持つ大学である。東工大と大

大きく違うと感じたのは、学生の知的好奇心だ。私たちのプログラムの一部である研究室見学に、自分の授業に遅刻してまで同行した日本人学生が複数いたのだ。見学中は私たち東工大生の誰よりも真剣に話を聴き、沢山の質問をしていた。このような学生は日本ではあまり身近にいないため、私は大きなカルチャーショックを受けた。

また、ヨーク大学の教授による **metaphor** に関する授業がとても興味深かった。そのほかの授業は全て **science** や **engineering** に関するものであり、正直あまり興味を持ってなかった。そんな中、言語学に分類されるであろう分野を理系的な視点から捉えたこの授業に胸を打たれた。

そして、同じ系の先輩からも多くのことを学んだ。彼も私と同様に、東工大に在籍しながら **science** や **engineering** 以外の分野に興味を持っていた。しかし私と決定的に異なるのは、彼が自分の興味分野についてしっかりと理解していて、その分野について主体的に学んでいることだ。彼の研究やその他の興味のある分野についての話を聞くうちに、東工大での学びに対する諦めが少しずつ薄れていったのを感じた。

このように、今回の超短期派遣を通して、学ぶことの楽しさを認識することができた。漠然と単位をとって大学を卒業する前にこのような機会を持てたことは感謝してもしきれない。とはいえ、私は未だに自分が何に興味があるのかについてはっきりと認識できていない。ただ、**science** や **engineering** の分野でないことは明らかだと思う。そのため、まずはたくさんすることに挑戦し、その経験を通して自分の興味と向き合っていきたい。

8-4 化学系 学士2年

将来、海外の修士課程や博士課程に進学したいため、その参考に超短期海外派遣のプログラムを申請した。また、コロナで長期間に旅行できなかつたため、いいチャンスで旅行したいなという気分もあった(笑)。

イギリスに着き、地下鉄から出て町並みを見た瞬間、今私たちはヨーロッパにいるんだと強く実感した。新鮮な顔、現地の人と異なる服、口に合わない料理、いろいろなところから違和感が感じられ、2年前に一人で日本へ留学に来た自分を思い出した。どの店に入っているか、どのように注文するかが全部分からなく、恥ずかしくて周りの現地の人を真似するなどのことをした。その時と同じ、新しい環境への不安や新しい言語を話す恥ずかしさはイギリスでも出た。幸いなことに、今回同行な学生が11名いらっしゃるの、みんなで互いに支えて、不安やストレスが解消できて、イギリスにすぐ慣れた。

人種差別に遭ったが、イギリスでたくさんの優しい人にも出会った。NPLで熱心にPhDのプログラムを紹介してくれたスタッフ、ICLで発表の写真を撮ってくれた現地の学生、地下鉄の階段で重いスーツケースを運んでくれたイギリス人、ヨークミンスターに無料で入らせてくれた受付の方、ヨーク大学でディスカッションに加えて話しかけてきたチューターの方、Queen Mary大学食堂でカードが急に使えなくなって、お金がある時に支払えばいいと言いながら料理を出した食堂の方などなど、現地の色々な人から好意をもらった。イギリスでの滞在時間がもっと長く、現地の人ともっと交流したいと思った。

言語を上達するには環境が必要だと実感した。最初の数日間は、英語を話したいが頭の中に最初に浮かんできたのが全て日本語だった。時々混乱してイギリス人に日本語と英語を混ぜて話したこともあった(笑)。一週間ぐらい経て、言語をやっとスイッチしたと感じた。メンターとも話せるようになり、授業も聞けるようになり、短い間だったが、イギリスの大学生活を体験できた。特に、メンターの専攻は私と同じく化学であり、ヨーク大学で化学の専門の授業を体験できてよかった。

今回のプログラムが私にとってとても貴重な経験だった。異なる学年の人と交流でき、将来の自分も先輩たちのように自分の研究を熱情満々で紹介したいと思い始めた。引率の小林先生、一ノ瀬先生に深く感謝を申し上げます。また、同行の皆さん、同じ部屋の先輩、一緒に申し込んだ友達にも感謝いっぱいです。皆さんがいるこそ、とても素敵な二週間で過ごせ、イギリスを満喫できた。

8-5 融合理工学系 学士2年

私は今回のイギリス超短期派遣は初めてで、ヨーロッパに行くのも初めてだった。ロンドンで色々な大学を見学したり、当地の学生だけではなく、日本から留学に行った学生たちもたくさん話して、知り合いになった。インペリアの学生と話をして、自分の教授はストライクのデモに参加して授業はできなかったことに対して非常に印象深く、日本ではあり得ないことだと思った。

ロンドンでは、National Physical Laboratory と3つの大学を見学し、自分は博士課程を進学する意欲も高まった。そして、ロンドンの見学ほとんど午前で終わって、午後は自由時間なので、イギリス博物館や、ロンドンアイなどロンドンのランドマークも見学しました。

ヨーク大学はホームステイできなかったことは残念だったが、大学側は学生寮を用意してくださって、実際のヨーク大学の学生生活を実感することができたことも楽しかった。私はヨーク大学のメンターさんに対して特に印象に残った。彼女は University of Oxford で学部を卒業し、飛び級で直接 PhD への進学した。心理学専攻なので、心理学についての知識をたくさん話をしてくれた。

私がイギリスに行く前に、一番心配だったのは、すりど人種差別だった。私たちのチームは、みんな全部ウエストバッグを用意して、お金やカードは全部ウエストバッグに入れて、コートの下に付けていた。また、携帯は首掛けのストラップを使った。私と友達は Bond Street で歩いているとき、2人のリュックのチェックが開かれたことがあって、幸い2人とも貴重品は無くしていなかった。また、ヨークにいる時も、友達と話をしている時に、知らない男に bullshit と言われた。少し悲しかったけど、これはごく少しの人で、他のイギリス人はみんな優しくかった。

イギリスでは、道路に車が走っていない限り、赤信号を待たずに道路を横断する人が多い。自分は最初あまり慣れていないが、時間が経つにつれてだんだん慣れてきた。

今回のプログラムを通じて、たくさんの人と仲良くなって本当に嬉しかった。自分も世界中の研究者たちの発表を聞いて、日本にとどまらず、グローバル的な研究者になりたいと思った。そして、引率者の小林先生と一ノ瀬先生は、本当に責任感を持っていて、親切でいい先生だ。2人の先生がいるからチームの雰囲気も良くなった。

8-6 機械系 学士3年

今回、この研修に参加したのはコロナウイルスのパンデミックによって遠のいていた海外という場所、特にヨーロッパに行ける貴重な機会であり、学部 3 年の春という研究室決定のタイミングで、グローバルな視野で自分が何を学びたいのかを見つけたかったからだ。

私はもともと英語が得意ではない。だから最初の壁にぶち当たったのは渡航してからではなく、事前学習でヨーク大学から東工大に留学している学生の話聞いた時だった。それは渡航 1 ヶ月前のことだったが、このままではダメだと思い、その日からリスニングとスピーキングの勉強を始めた。所詮 1 ヶ月の勉強なので付け焼き刃に過ぎず、研修中も聞き取れない言葉が多かったり、自分の主張がうまく話せなかったり、悔しい思いをたくさんしたが、この機会に帰国後も英語の勉強を続けようという良いきっかけになったと思う。

中高生の時に参加した海外研修と大きく異なったことは、自由度がとても高かったこと。ロンドンではプログラムは午前には終わるため、午後は自分たちで電車やバスを利用しミュージカルを見に行ったり、博物館を訪れたり、本場のパブで食事をする事ができた。だが、その一方で日本人と行動することが多く、英語でのコミュニケーションといった点ではあまり力はずかしくなっていたように思える。また、食事がおいしくないと言うのはもともと聞いていたが、やはり私の口には合わず、学校やレストランで出された食べ物の味が薄かったり甘すぎたりしたが、スーパーでおいしいものを買って食べたり、塩やケチャップで味を足してみたりそういった食事にも工夫ができたのが面白かった。

今回の行程で様々な場所を訪れたが、私が 1 番感銘を受けたのはインペリアルカレッジに通う日本人学生との交流だった。彼らは留学生ではなく中学や高校からイギリスに移住しインペリアルカレッジに入学した学生だったが、私たちがラボツアーに行く際、彼らも参加したいと他分野の研究に興味津々だったことに驚いた。正直、私が東工大のラボツアーをやると言われても、行けと言われないと行かないと思う。私にとってそういった他分野の最先端の技術や学問は勉強するものでしかなく、興味の対象ではないからだ。ただその学生たちは目をキラキラさせながら積極的に質問し、学ぶことに非常に意欲的であった。なぜそんなに興味を持てるのかと彼らに質問をすると、「私たちは理系オタクだから世界 6 位の大学のすごい研究設備や研究内容を見学してみたいんだ。」と当然のように言われ、自信や主体性を持たず学んでいた自分がとても恥ずかしくなった。

イギリスに行くということでグローバルな部分に目を向けすぎていたが、理工人として何を身に付けるべきか、私が学ぶ理工学と言うものがどれほど社会的に価値のあるものなのか、そういったことを講義の中で感じ取ることができたプログラムだった。

最後に、引率していただいた小林先生、一ノ瀬さん、一緒に参加した学生の皆さん、日本及び現地でお世話になった方々に、深く感謝の意を申し上げます。

8-7 機械系 学士3年

今回の超短期派遣で得たものの中で最も重要なことは留学のハードルが下がったことである。留学以前は英語力を心配していたが、イギリス英語がとても綺麗だったので思っていたより聞き取ることができた。いくつかの講義を受けたが教授が話す英語は TOEFL などよりも遅く、単語さえ知っていれば理解することができた(ただし、NPL の方々が話す英語は非常に速くほとんど理解できな

った)。スピーキングについても滑らかではないが自分の言いたいことを伝えることができ、想定していたよりも留学は難しいものではないと感じた。今回のプログラムでイギリスが素晴らしい国だと体験できたので次回は交換留学など長期間の留学プログラムに参加したいと思った。

しかし、メンターの友人との会話や店のスタッフが話す英語はかなり速く聞き取りが難しかった。スピーキングについてはもっと練習しなければいけないが、英語力よりも質問力が重要であると感じた。グループの1人の先輩は英語力も高いが様々な人に様々な質問をしていて会話を楽しんでいた。私は他の学生よりもコミュニケーションが苦手なので、今後はそれを改善出来るように頑張りたい。

イギリスで受けた最も大きなカルチャーショックは人々の交流の多さである。日本人は比較的親切でマナーもしっかりしていると思っていたがイギリス人もかなり紳士的だった。特に店員の対応がどこも素晴らしく、店や博物館についての説明をていねいにしていただき、さらに客への対応が終わると笑顔で "You're welcome. Enjoy!" と言うのでこちらも気分よく過ごすことができた。私はアルバイトの業務の1つに接客があるので今後は彼らを真似て取り組もうと思った。

また、イギリスの人々はパブによく集まってお酒を飲んでいて彼らのほとんどがスマートフォンを触っていないことに驚いた。留学前にヨーロッパではそれが標準であることは知っていたが実際に見てみると改めて日本との違いを感じた。飲みの席では日本も同じかもしれないが、パブ以外でも会話中にスマートフォンを見ている人はほとんどいなかった。私はこれが本来の人々の交流であると思うので、イギリスの人々の交流の仕方は私がまた留学したい大きな理由になった。

8-8 材料系 学士4年

プログラムを通じて、「自分が思っているよりなんとかなる」ことを感じた。英語でのコミュニケーションにおいて、英語力に不安があり、初めは話しかけるのにとっても勇気が必要だった。しかし、せっかく多くのお金と時間をかけてイギリスに来ているのだから、英語を使わないともったいないと思って話しかけてみると、向こうはこちらが何を話そうとしているのか理解しようとしてくれるし、助け舟も出してくれ、なんら問題もなくコミュニケーションをとることができた。英語力に不安があっても何とさえいいのかわからなくても、とりあえず勇気を出して話しかけてみることの大切さを学んだ。逆に、英語力に不安で自分の意見を発信しないことの方が失礼だとみなされる文化だと感じた。それに気が付いてからは、積極的に発言することを意識して、英語力の向上を図った。この経験を通じて、どのようなことでも、それを通じて何かを得ることの重要性を改めて感じた (University of York の先生に教えていただいたことの1つ)。

今回の渡航を通じて、将来に向けての展望に変化があった。自分がすでに B4 であることから、渡航前は中長期留学プログラムへの参加は諦めようとしていた。しかし、渡航中に、日本の大学からの交換留学生との話や、多文化を知ることの面白さ、流暢な英語でなくとも伝えようという気持ちさえあれば十分に伝わることなど様々なことを体験し、学年を理由に留学を諦めるのはもったいないのではないかと思うようになった。今回は日本語が話せる東工大生 12 人のグループで行ったため、プログラム中以外は日本語でコミュニケーションをとっていたし、何か困ったことがあれば同じブ

プログラムに参加している人に日本語で聞けばよく、温かすぎる環境で、留学とは言えないかもしれない、と感じた。そのため、次は、日本人が自分だけ、自分で英語を使ってなんとかしなければならぬ状況に自分を置いてみたいと思い、M1 か M2 での中長期留学への希望が出てきた。また、Sunderland の日産で働く日本人の方のお話を聞いて、海外勤務へのイメージが変わった。今までには、海外勤務なんて言語の問題も環境の問題も様々な点で大変だろうし絶対嫌だと思っていた。しかし、渡航を通じて、そういった困難を自分の力で乗り越えて仕事をするのは大きなやりがいがあるだろうし、とても色鮮やかな人生になるのではないかと感じ、今後の自分のキャリアプランの選択肢が広がった。

自分のキャリアプランを考える、英語力の向上、多文化を知る、など全ての点で今回の渡航はとても有意義な時間であった。本プログラムに携わっていただいた全ての方々に感謝したい。

8-9 融合理工学系 学士4年

グローバル理工人のプログラムで一年の時にフィリピンに行ったが、その時に短期間で、大学で授業を受けたり、企業の見学などができ、また、一緒に行った学生も学年、学部が様々で、たくさんのことを学ぶことができたので、またいつか同じようなプログラムに参加したいと思っていた。今回の派遣先でイギリスを選んだのは、ホームステイができるのと、今までアジア圏の国しか行ったことがなかったので、ヨーロッパの国に行ってみたいと思ったからである。残念ながらホームステイをすることはできなかったが、学生寮に泊まることができ、イギリスの学生の生活を経験することができたので、とても良い経験になった。

ロンドンでは今まで行ったことのある国と違い、様々な国の人が生活しており、初めは新鮮だったが、すぐに心地良さを感じたので驚いた。今まで海外の国に行く時は楽しみではあったが、事前に知識があったにしても知らないところに行く怖さや不安があった。しかし、ロンドンはそのようなことがなく単純に楽しむことができた。今まであまり実感したことはなかったが、授業や研究室で留学生と関わることが多かったため、大学の四年間で大きく成長した点ではないかと思い、嬉しく感じた。NPL では英語で研究発表をするという経験をさせて頂いたが、普段の研究室のゼミ発表を英語でやっているためかあまり緊張せず発表することができた。しかし、質疑応答では十分に答えることができず、もどかしく感じ、まだまだ英語の勉強を頑張らないといけないと思った。

今回3つの大学を訪問し、学生や先生とお話する機会があった。今までは人と英語で会話する時に躊躇ってしまい、あまり話すことができなかったが、今回は間違っていてもとにかく話してみようと思い積極的に話すことにし、実践できたことが嬉しかった。他の面でも、一年の時にフィリピンに行った時は、自由時間などは上級生についているいろいろな場所に行っただけであったが、今回の派遣では交通の便も良かったこともあり、自分の行きたいところに行ったり、以前よりも積極的に行動できるようになっていることを自覚することができ、成長を感じることで良かった。

イギリスに行く前は、イギリスの大学を見たい、様々な場所を観光したいなど、イギ

リスでしかできないことを得ようと思っており、実際たくさんを経験し、学ぶことができた。しかし、振り返ってみると、自分の成長や、将来留学したり、海外に勤務したりする際のイメージや語学における課題など、自分と向き合う期間になり、今まではただぼんやりと将来留学したり海外で働きたいと思っていたが、そのような目標の中で現在の自分の立ち位置を確認することができた。両方とも友人に誘われ、とりあえず海外に行きたいという思いであり深く考えず参加した海外派遣であったが、思いがけず自分の成長を感じることができ、入学して1年目と卒業に近い4年生の時期に2回参加して本当に良かったと思った。それぞれの派遣で声をかけてくれた友人に感謝を伝えたい。

最後に、引率してくださった小林先生、一ノ瀬さん、派遣メンバーのみなさん、現地でお世話になった方々、東工大で海外派遣を支えてくださった方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

8-10 情報通信系 学士4年

コロナ禍ですっと叶えなかった海外渡航が、卒業前によくできたことが感動に思えた。これまでに日本国内の実践型海外派遣プログラムに相当する科目2つ取ったが、何れも今回の体験とは比べられないと思った。言うなれば、ラボのきれいな環境ですっと試運転しているような感覚だった。実際海外に行き、英語を話さざるを得ない、知らない環境で暮らさざるを得ない状況に置かれて、初めて実感し、得られるものがある。

中学まで、英語の成績がずっと最下位で、英語を話すことが怖かった。テレビの中の人、リスニングテストのナレーション、みんな流暢な英語を話せて、私だけができないというコンプレックスを持っていた。それでもコンプレックスを克服しようと海外に出た。そして、イギリス訪問初日はほぼ何も話せなかった。

その日の夜、街中のアイス屋さんで迷い込んで、片言の英語で注文しようとしたら、優しく接してくれた女の子の店員がいた。彼女はインドからの留学生で、話したら奇遇にも翌日訪問予定のICLの学生だった。実に中学教本レベルの会話だったが、私にとっては大きな転機だった。それは初めて英語圏の国で人とまともな会話をできたことと、流暢な英語よりも話したい意思と伝えたい情報こそが最も大事であると意識したことだ。

以前にも何処かでそう教わっていたが、こんなに鮮明に体感したのは初めてだ。その後、私は躊躇なく英語を話せた。ボロボロな英語かもしれないが、イギリスの人は紳士的で、何を聞いてもよく対応してくれる。そして何事もエンジョイするテンションが何よりのフィードバックだった。帰りの電車で、同行の人から「あなたがこの中で一番喋っている」と聞いた時、少し嬉しかった。本当は今あまり話せないが、それでもとにかく話しているだけだった。「今できないことに恥じない」、これは多分私がこの旅で得られた最大な収穫だと思った。チャレンジ精神とも言えよう。

その他にも多大な収穫があった、イギリス人の価値観や人生観、現地でしか知ることのできない知識。これらは最後には、私の視野の一部となる。足りないところもたくさんあった、それらを補いつつ、なりたい自分になっていく。

これから参加する学生たちもプログラムを通して自分なりの収穫が得られることを願う。そして、今回一緒に参加してくれた方々に、深く感謝を。

8-11 融合理工学系 学士4年

特定課題研究（卒論）発表の次の日の朝早くに出発であったため、直前までこのプログラムの準備をしておらず、実際、コロナ関連の申請も前日に行ったし、忘れ物もたくさんしてしまった。このように、B4 で研究の進みが遅かった自分は、直前とてもバタバタしてしまった。しかし、今回のプログラムは、とても有意義で様々な経験を得られた良い機会となった。そして、なんといってもとっっっつても楽しかった。それらのうち、研究に関することと、カルチャーショックについて、そして、これを読んでくださる方へのアドバイスを記述しようと思う。



まず、自分の研究にとっても自信が持て、また、修士ではさらに研究に励もうと思ったことだ。今回のプログラムでは、NPL では自分の研究発表と質疑応答をし、ヨーク大学では研究者、PhDの方、先生など、様々ないわゆる研究の先輩にあたる方々と個別に自分の研究を話す機会があった。自分の研究はいわゆる文系分野であるため、特に、ヨーク大学では、言語学や芸術、心理学といった自分の研究分野に近い方々と話す機会が多くあり、東工大ではあまりできない研究方法や考察など深くまで話すことができ、とても楽しかったし、自分も研究者の1人なんだな、と感じた。そして、ヨーク大学で、自分の専門ドンピシャであるが、

苦手な分野でもあったレクチャーがあった。イギリスに来てからずっと自分の専門とはかけ離れた分野のレクチャーや紹介が多かったため、嬉しくなってしまう、また、そのレクチャーがとても楽しかったため、先生に話しかけて、おすすめの論文や本を紹介してもらった。そして、修士では苦手分野でちゃんと勉強しようという気持ちになったし、つい直前まで卒論にあんなにも苦しめられていたのに、早く研究室に戻って本を読んだり研究をしたりしたくなった自分がいた。このように、自分の研究に対する意識を確認し、意欲向上となった素晴らしい機会であった。

次に、カルチャーショックについて述べる。コロナ前は何度も東南アジアに行っていたため、そうそうカルチャーショックを感じないだろうと思っていたが、違った。空港に着いた途端、感じてしまった。特に、日本のホスピタリティの高さ、そして、日本は本当に綺麗で便利な場所だと感じた。イギリスでは、日本ほど空港や駅での案内が多くなく、「Way Out って書いてあるのに違うじゃん!!!!」と何度も思った。他にも、チューブの車両が色分けされているわけではなく、プラットホームでの行き先案内も電車車両の行き先表示を見ろって言っているなど、複数の路線を共有しているホームではわかりづらいといった、不親切な案内が多かった。また、これは誰もが書いていると思うが、ご飯が美味しくなかった。イングリッシュブレックファストって字面だけ見るとおしゃれだが、実際は食べれるけどそこまで美味しくはなく、しかも、それをほぼ毎日の朝食で出っていたので流石にきつかった。それ以外に、これといったイギリスの料理はあまりないとよく言われているが、実際そうであり、レストランのほとんどがイタリアンであった。ちなみに、ロンドンで滞在したホテルのパブで、フィッシュ&チップスを食べた



が、ちょっと高いのもあり普通に美味しかった。ビールはイギリスの方がフルーティなビールが多く、飲みやすいし美味しかった。あと、そのパブは人も少なく、おすすめです。



最後に、アドバイスとして、忘れ物しても大丈夫だということ、必要最低限の英語は勉強をすること、トラブルっても笑い話にしてしまうこと、とにかくしゃべってみることが大事だ

と思った。(アドバイスでもなんでもありませんね。とにかくチャレンジって大事だなと感じました。)

このように、今回のプログラムでは様々なものを得る良い機会に恵まれた。ここには述べていないが、メンターはとても良い人であったり、トラブルにあったり、パブで酔っ払ったり、サッカーを見たり、ロンドンならではの空港に行ったりとほんとに日本では味わえない経験を積むことができた。総じて、とても楽しかった。また、イギリスから帰ってきた後で、研究室の日本語が使えない先輩と英語で交流することができたし、帰りの飛行機で隣の人との会話も盛り上がったし、早速、英語がスルッと口から出てきて、英語に対する抵抗感を拭えることができたのもとてもよかった。今度は、もう少し長く行きたいな。2週間だけじゃ足りなさすぎる。

8-12 機械系 学士4年

今回の超短期派遣イギリスを通して、様々な経験を得ることができた。私自身、今回が初めてのヨーロッパ訪問であり、新鮮な体験ばかりであった。

まず、NPL では、研究施設の充実を感じるとともに日本とは異なる雰囲気に変に魅力的に感じた。NPL では、PhD の学生も多く研究していて大学と研究機関との結びつきが日本より強い印象を受けた。昼食では、オープンスペースで色々な分野問わず交流していたり、他分野との結びつきも強いと感じた。NPL では、初めて英語で自身の特定課題研究の内容を発表する時間もあった。とても緊張し、自身の英語力不足を痛感すると同時に今後に向けて大きな経験を得た。

次に、インペリアル・カレッジ・ロンドンでは留学生が半数を占めていることもあり、多様性を強く感じた。研究設備も分野問わず非常に充実していた。

さらに、ヨーク大学では寮に四日間ほど滞在し、イギリスでの留学生活の疑似体験をすることができた。ヨーク大学は、地方にあることもあり自然と調和し、キャンパスも広く研究に集中できる環境が整っていると感じた。現地の大学生とも多く交流することができ大変貴重な体験ができた。ヨークの街は、日本のように平和に感じ、古い建築物も大変美しく魅力的であった。

他にもクイーンメアリー大学や日産自動車のサンダーランド工場見学など刺激になる経験を積むことができた。クイーンメアリー大学では、大学内に墓地があったり大学が街と一体となっていると感じた。日産自動車では、実際に海外で活躍する日本人のお話を聞き、より将来グローバルで働きたいという思いが増した。

今回の超短期派遣イギリスで、発表などを経験させていただいた過程でやはり一番痛感したことは、英語力不足であった。特に、リスニング力は鍛えなければいけないと改めて感じた。日本でも大学のプログラムを利用したりして英語をより学ぶことで自身のキャリアが広がると改めて感じた。さらに英語力を高めるため、大学院では中期間の留学なども視野に入りたいと感じた。英語力不足は、感じたのですが現地の方と交流する楽しさなど、今回の経験が今後の英語学習の大きなモチベーションになったことは間違いない。そのため、今後は自身の研究だけでなく英語力も重点的に高めていこうと思う。

